

2025年『撰集抄』読解解説《緑は単語、青は文法、紫は古文常識》

み むろ と

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、

中國（唐土）

意 志

もろこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、

はりま

播磨の明石といふ所になん住みていまそかりける

驚き呆れる（ほど）

存続

同格

連体形

に、アあさましくやつれたる僧の、來たりて物を乞ふ

侍り。

〔注〕○御室戸——現在の京都府宇治市にある三室戸寺。

み むろ と じ

・「法印」は僧位の最高位。僧の官職では「僧正」にあたる。

・「唐土」は中国の古い呼び名。僧が中国に渡るのは、仏教の教義をさらに極めるため。

・「もろこしに渡り給はん」の「給ふ」は隆明の心内文で一人称ではあるが、筆者から隆明への敬意。天皇以外は基本的に自敬敬語にはならない。

・「やつる」は「（他動詞）やつす」の自動詞。（①目立たない「粗末な・質素な」服装「様子」になる ②（病気などで）みすぼらしくなる）。ここでは後に貧乏であることがわかるので、「みすぼらしい」と訳す。なお、「質素」だと（本当はお金があるけれど）慎ましくしていることもあるので不適切。

訳：昔、御室戸寺の法印隆明という、尊い高僧が、「中国に渡ろう」と思いなさって、西の国に向かい、播磨の明石という所に滞在していらっしゃった時に、驚き呆れるほどみずぼらしい格好をしている僧で、やって来て物乞いをする僧がおります。

まつたくのあかはだか

さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。

しりさき

連体形終止

人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。

- ・「さながら」は通常、打消しを伴う場合に「まつたく」となるが、ここでは何も着ていないうことが打消となる。

・「赤裸」の「赤」は「すっかり」の意味。「赤裸々」と同じ。
せきらら

○ゑのこ—子犬。

- ・「なぶ」は古語では「(植物などを)靡かせる」だが、ここでは現代語での「なぶる(面白がっていじめ、苦しめる。愚弄する)」の意味。

・「ける」は連体形終止。鎌倉時代の作品なので、現代語同じで普通の終止と同じだとみなしてよい。

訳：まったくの丸裸で、子犬を脇に抱えています。周りの人々は、前後に立つて笑つたり冷やかしたりした。

「あやしの者や」と思して見給へば、清水寺の

おぼ
きよみづでら

宝日上人にていまそかりける。

あり + 敬意

- ・(大学受験レベルを超えるので参考までに)「あやしの者や」の「や」は詠嘆。

「形容詞語幹(シク活用だと終止形)+の+名詞+や」で「(形容詞)な(名詞)だなあ」。例)をかしの御髪や。(訳:きれいな御髪だなあ)『源氏物語』

・「上人」はすぐれた知徳を備えている高僧。また、高僧の敬称。
しょうにん

・「いまそかり」は「あり+敬意」の「いらっしゃる」。

・丸裸の乞食にこれまで敬語は使われていなかつたが、隆明が「宝日上人」だと気付いた箇所から、作者も彼に敬語を使っている。

訳：(隆明が)「不審な者だなあ」とお思いになつてご覧になると、(なんと)清水寺の宝日上人でいらっしゃつた。

「イひが目にや」とよく見給へど、さながらまがふ
べくもあらざりければ、かきくらやる心地し
て、伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」

自発

とのたまはせければ、

・「ひが目にや」は隆明の心内文。「あらむ」が省略されている。

・「かきくらす（搔き暗す）」は（①（雨雲などで）辺り一面を暗くする ②心が沈む・悲しみにくれる）。ここでは心情なので②。

・「あれ」は遠称の代名詞だが、少し離れたものを指すこともある。

ここでは目の前なので「これ」の方が適切だが、心理的に遠く感じて「あれ」と言ったのもしれない。

・「わざ」は①法事・葬儀 ②行為・行い ③事態・様子など。ここでは③。

・「のたまはす（宣はす）」はおっしゃる。「言う」の尊敬語。

「のたまふ（宣ふ）の未然形+尊敬の助動詞「す」が一語になつたもの。

訳：「見間違いだらうか」とよく（目を凝らして）ご覧になるけれども、まさしく間違うはずもなく（宝日上人）その人だったので、（隆明は）自然と悲しみに心が暗くなる感じがして、（その場に）倒れ伏して、「これは滅多にない事態であることよ」と仰つたところ、

断定

視覚的推定 大勢 ～で～を使って

上人ほほゑみて、「まことに物に狂ひ侍るなり」と
て、走り出で給ふめるを、あまたして、

過去

取りとどめ奉らんとし侍りけれども、

こぐら

連体修飾

完了 ～ので

さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、

エ力なくやみ侍りけり。

どうしようもない

・「物に狂ふ」は「物狂い」という現代語があるように、正気を失っている・乱心。なお、「物」は元々「物の怪」で、「物の怪につかれる」の意味から。

・本当に狂っている人は自分で自分を客観的に狂っているとは言わないでしょうから、ここで実は狂人を演じていることが匂わされています。

・「侍るなり」の「なり」は「ラ変動詞の連体形(侍る)」に接続しているので文法的には断定と伝聞・推定の見分けは付かないが、一人称なので断定。「あまたして」の格助詞「して」は①～で(手段・方法)②～とともに・～で(共同)③～を使って・～に命じて(使役の対象)～。ここでは②と③の解釈が考えられる。隆明に依頼されなければ、人々は乞食だと思っている人をわざわざ引き留めないはずなので、依頼(命令?)していると思われる。

ただ、隆明自身も一緒に引き留めているはずなので、③共同で訳すのも自然。なお、③は現代語にも「みんなして責め立てる」の形で残っている。

・「さばかり(然許り)」は①それほど②非常に・とても。ここでは②。

・「やみ」は「やめ(下二段・他動詞)」ではなく「やみ(四段・自動詞)」。

訳：上人は笑つて、「本当に気が狂つておるのです」と仰つて、走り出していらっしゃるように見えるのを、大勢の人で、引き留め申し上げようとしましたけれども、(上人は)木々のとても暗い茂みの中にお入りになつてしまつたので、仕方がなく、(追いかけるのは)中止になりました。

度を過ぎて

自発

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひ

て、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く

尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えず

四段動詞 完了直接過去

なり給ひに き。

・「すべき方なし」は「なすべき方法がない・どうしようもない」。同様に「どうしようもない」となる、諦めの場面で登場する語は以下の通り。

為む方無し・為べき方無し・術無し・詮無し(詮=方法) ※なすべき方法がない

言ふ甲斐無し ※言つても仕方がない

如何はせむ・如何にせむ(反語) ※どうしようか、いや、どうしようもない

敢へ無し(敢ふ=これられる)・力無し・え避らざ・避らぬ ※できない

遣らむ方無し・遣る方無し(遣る=不快な気持ち晴らす) ※心を晴らせない

わりなし(理のわり)・是非に及ばず(是非=道理)

・「またも」は「二度と(は)」の意味。漢文の部分否定のような表現。

・「見ゆ」は①見られる ②見える ③結婚するなど。

・ここでは「①見られる」か「現れる・姿を現す」。

なお、元々「ゆ」は奈良時代(上代)の助動詞で受身・可能・自発の意味。

(文法書にも載っていることが多いので、『体系古典文法』『完全マスター古典

文法』などをお持ちの方は確認しましょう。)

・「うすなり」の「なり」は助動詞ではなく四段動詞。

(もし助動詞なら、「す」はラ変型の「ざる」になる)

訳：隆明法印は、度を超してどうしようもなく悲しく感じなさって、(他に)これという理由や目的もなく、その里に留まりなさって、(上人の行方を)広く捜し求めなさるけれども、その後は二度と(上人は)見られなくなりなさった。

そこで

存続

さて里の者にくはしく事の有様を問ひ給へりけれ

格助詞

受身

ば、「いづくの者だけ」とも人に知られて、この村に住みて
も二十日ばかりなり」とぞ答へ侍りける。

・「さて」は副詞だと古文单語帳にも載る（①そのまま・そうして ②その他（「さての」「さては」等の形で））。

ここでは副詞だと文脈に合わないので、接続助詞なので、「そこで」。

・副助詞「ばかり」は（①ほど（程度）・②だけ・にすぎない（限定））。

ここでは上人のことを聞かれた村人が「彼のことはよくわからない」という返事の中なので、②。但し、厳密に二十日ではなく約二十日という意味だろうから、「ほど」の意味もあるはず。

訳：そこで（隆明は）里の者に詳しく事情を尋ねなさつていたところ、「どこの者とも人々に知られないで、この村に住み始めて二十日（ほど）に過ぎない」という回答でございました。

オ「この事、限りなくあはれに覚え侍り。

なるほど

この上なく

何と、げに「世を捨て」といふめれど、身のあるほど

逆接

推定逆接

は、着物をば捨て、こそ侍るに、あはれにもかしこく

畏れ多い・立派だ

も覚え侍るかな。

・「～覚え侍り」の主語は設問（三）にあるように作者（語り手）。

なお、もし隆明であれば「～覚え給ふ。」などの敬語が加わるはず。

・「げには「なるほど・確かに。本当に」。他者の言動や知識に対し、納得して感動していることが多いが、ここでは逆接の前なので「確かに」という譲歩。

・「世を捨て」は「出家する」。他にも同じ意味の表現は「厭ふ・家を出づ・飾りを下ろす・頭下ろす・形変はる・形を変ふ・髪を下ろす・様変はる・様変ふ・削ぎ棄つ・背く・入道す・御髪下ろす・身を捨て・（身を）逍す・世を去る・世を捨て・世を背く・世を遁る・世を離る」など。

訳：この出来事は、この上なくしみじみと心動かされる気がします。

なんとまあ、確かに（出家は）「世を捨てる」と表現するようだけれども、（そうはいつもやはり）生きているうちには、（せめて）衣服は捨てないものでございますのに、（衣服まで捨てなさった上人は）しみじみと心動かされ、立派にも思われますなあ。

おおかた・だいたい

係助詞

サ変

存続

およそ、この上人はようづ物狂はしき様をなん

し給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄り

がふし

て、合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ

わざ

給ふこと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし

視覚推定 ひとかた

給ふ時も待るめり。一方ならずぞ見え給ひし。

・「ようづ（万）」は名詞だと①様々 ②万事などで、

副詞だと「何事につけても」。ここは「ようづの」などではないので副詞。

・「うし給へりけるなり。」の「なり」は、直前がラ変型の連体形なので、文法的には断定も伝聞・推定もありうる。

文脈的にも語り手の字の文で、両方とも解釈しうる。

○合子—ふた付きの容器。

・「合子」は食器としてのほか、托鉢（=修行僧が経文を唱えながら市中を歩い

ほどこ

きょうもん

たり人家を訪問し、施しの米や金銭を受けて回ること。）にも利用された。訳：おおかた、この上人は、何事につけても正氣を失ったような（常識から外れた）行動をしなかつていたという。

ある時は、清水の滝の下に立ち寄って、合子〔=ふた付きの容器〕という物に水を入れて、陰部を洗いなさることが、日常的な行為であった。（また、）非常に静かに余念をまじえず（仏道に）心を澄ましながら時もあるようです。並一通りの僧ではなく見えなさいました。

もも

澄み渡る心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひは百に変はりけるは、「カよしなき人の思ひ

断定疑問

を、我のみ一方にはどどめじ」と思しけるにや。

・補助動詞「わたる」は時間または空間的な広がりを表す。「澄み渡る」は「(月や空・水などが)一面に曇りなく澄む」と空間的な広がりを表すことが多い表現。ここでは心の空間で解釈できる。二文前に「思ひ澄まし」とあるように、余念をまじえず仏道に専念している。

○さきら—才知。

・「心の内」と「外」は対比になつてゐるので、内面と外面。

・「百に変はり」は常識とは異なるという意味で「変わつてゐる」というよりも、内面が「いつも」同じに対し、外面は「百に変わる」なので「変化」。

清水の滝で合子を使って陰部を洗うという変な行為を行つたり、非常に静かに精神統一していたりの変化を指すのでしよう。

・「よしなし(由無し)」は^①つまらない・取るに足らない ^②関係がないなど。

③方法がない ④理由がないなど。
人を修飾する場合、①②が多く、ここでは①で凡人・俗人を指す。

・「一方」は形容動詞だと「並一通りなさま」だが、

ここでは名詞(+格助詞)なので「一人(の方)」。

訳..仏道に専念し切つてゐる心の内側は、常に同じ才能と知恵を持つてゐるけれども、外見上のふるまいが数多く変化していたのは、「取るに足らない(平凡な)人々からの(尊敬の)念を、自分だけ一人には受けないようにしよう」とお思いになつたのだろうか。

なかの

こも

この上人ぞかし、中関白の御忌に、法興院に籠りあかつぎがた

て、暁方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、

○中関白——藤原道隆。

・藤原兼家の第一子で、道長の兄。

『枕草子』の作者である清少納言が仕えた定子ていし「=一条天皇皇后」の父親。
摂政・関白となつたが、死を前にして子伊周これちかに地位を譲ろうとして果たせず、
道長に権勢を奪われた。

・「御忌めいにち（ぎよき）」は高貴な人の年忌=命日ていしの法会の敬称。

○法興院——藤原道隆の父、兼家が別邸を寺としたもの。

・「法興院」は「ほこいん」や「ほうこういん」と読む。

・（参考までに。）兼家は『蜻蛉日記』（藤原道綱母著）に出てくる夫。

・「暁方」は夜明け前のまだ暗いころ。未明。

訳：この上人（こそ、その人）だよ、藤原道隆の追善供養の日に、法興院に籠つ
て、夜明け前頃に千鳥が鳴く声を聞きなさつて、

キ 明けぬなり／賀茂の河原に／千鳥鳴く

今日もはかなく／暮れんとぞする

完了

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。

- ・「明けぬなり」の「明け」が下二段活用で未然形・連用形が同じ。よって、「ぬなり」が「完了・強意+伝聞・推定」か「打消+断定」かは文脈判断。ここでは結句に「暮れ」があり、既に夜が明けるタイミングのはずなので前者。
- ・鳥の鳴き声で夜明けに気づくことは古文あるあるなので、「なり」が聴覚的な推定であることとも合致する。

・「んどぞする」は「んとす」に強調の係助詞「ぞ」が加わって係り結びになつて
いる。「んとす」は元々「むとす」で、「～ようと/or～ことだらう」。

- ・「はかなし」は①頼りない ②ちょっとした ③あつけない。

ここでは時間の短さなので③。

・慣用表現「はかなくなる」は死を表す。この歌も、

- 『拾遺集』—三番目の勅撰和歌集。ただし実際には『後拾遺和歌集』に、
ほぼ同じ歌が「円松(または円昭)法師」作として載る。

訳：夜が明けたようだ。賀茂の河原で千鳥が鳴いている。

今日も(また)あつけなく日が暮れようとしている

と詠んで、(その歌が)『拾遺和歌集』に収録されなさった。

完了 即時

強意

明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思は
れ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印

自発

完了

断定

と載りて侍るは、上人の事にこそ。

- ・格助詞「より」はここでは即時「～やいなや～するとすぐに」の用法。
 - ・文末の「にこそ」は「あらめ」が省略されていてる。
 - ・一日が早く過ぎると感じるのは無常観。
- 訳..夜が明けたらすぐに、あっけなく日が暮れてしまうにちがいないこと「＝無常」を、以前から自然と悟つていらっしゃたのだろう。
- あの『拾遺集』には円松法印として載っておりますのは、この上人のことである。

2025年『撰集抄』現代語訳

昔、御室戸の法印隆明といふ、やんごとなき智者、
尊い高僧が、

「中国に

渡ろう」と思ひなさい、

西の国に

向かい、

もうこしに渡り給はんとて、西の国におもむきて、

「中國に

渡ろう」と思ひなさい、

滞在していらっしゃる時に、

向かい、

播磨の明石といふ所になん住みていまそかりける
播磨の明石

という所に

滞在していらっしゃる時に、

に、あさましくやつれたる僧の、來たりて物を乞ふ
驚き呆れるほど

みずぼらしい格好をした僧で、

やって来て

物乞いをする僧が

侍り。さながら赤裸にて、ゑのこを脇に抱き侍り。
おります。またく

裸同然の姿で、

子犬を

脇に抱えています。

人、後先に立ちて、笑ひなぶりける。あやしの者やと
周囲の人々は、前後に立つて、

笑つたり冷やかしたりした。

(隆明は)「不審な者か」と

思して見給へば、清水寺の宝日上人にていまそかり
お思いになつてご覧になると、(なんと)清水寺の宝日上人で

いらっしゃつたのだ。

ける。ひが目にやとよく見給へど、さながらまがふ
べくもあらざりければ、ウカキくらざる心地して、

「見間違いであるのだろうか」とよく(目を凝らして)ご覧になるけれども、まさしく間違う

はずもなく(宝日上人)その人だったので、(隆明は)自然と悲しみに心が暗くなる感じがして、

伏しまろびて、「あれはめづらかなるわざかな」と
(その場に)倒れ伏して、「これは

滅多にない

事態であることよ」と

のたまはせければ、上人ほほゑみて、「まことに物に
仰つたところ、

上人は笑つて、

「本当に

狂ひ侍るなり」とて、走り出で給ふめるを、人あまた
気が狂つておるのです」と仰つて、走り出でいらっしゃるように見えるのを、大勢の人を(隆明が)

して、取りとどめ奉らんとし侍りけれども、
使って、引き留め

申し上げようとしますけれども、

さばかり木暗き繁みが中に入り給ひぬれば、
(上人は)木々がとても生い茂る中に

お入りになつてしまつたので、

力なくやみ侍りけり。

仕方がなく、(追いかけるのは)中止になりました。

隆明法印は、あまりすべき方なく悲しく覚え給ひ

隆明法印は、

甚だしく

どうしようもなく

悲しく感じなさつて、

て、その事となく、その里にとまり居給ひて、広く

(他に)これという理由や目的もなく、その里に

留まりなさつて、

(上人の行方を)広く

尋ねいまそかりけれども、その後はまたも見えず

捜し求めなさる

けれども、

その後は

二度と(上人は)見られ

なり給ひにき。さて里の者にくはしく事の有様を

なさらなかつた。

そこで(隆明)は里の者に 詳しく

事情を

問ひ給へりければ、「いづくの者とも人に知られて、

尋ねなさつたところ、

「どこの者とも

人々に知られないで、

この村に住みても二十日ばかりなり」とぞ答へ侍り

この村に 住み始めて

二十日 ほどです

という回答でございました。

ける。オこの事、限りなくあはれに覚え侍り。

この出来事は、

この上なく

しみじみと心動かされる気がします。

何と、げに世を捨てといふめれど、身のあるほどは、
なんとまあ、確かに(出家は)「世を捨てる」と表現しますけれども、(そうはいつてもやはり)生きているうちに、
着物をば捨てずこそ侍るに、あはれにもかしこくも
(せめて)衣服は捨てないものでございますのに、(衣服まで捨てなさつた上人は)しみじみと心動かされ、立派に

覚え侍るかな。
も思われますなあ。

およそ、この上人はようづ物狂はしき様をなんし

おおかた、

この上人は、

様々

正気を失ったような(常識から外れた)行動を

給へりけるなり。ある時は、清水の滝の下に寄りて、
しなさつていたという。

ある時は、

清水の

滝の下に立ち寄つて、

合子といふ物に水を受けて、隠れ所をなん洗ひ給ふ
合子「=ふた付きの容器」という物に水を入れて、
洗いなさる

こと、常の態なり。いみじく静かに思ひ澄まし給ふ
ことが、日常的な行為であった。
(また)非常に静かに余念をまじえず心を澄ましなざる

時も待るめり。一方ならずぞ見え給ひし。澄み渡る
時もあるようです。
陰部を

並一通りの僧ではなく見えなさいました。
澄み切った

心の内は、いつも同じさきらなれども、外の振る舞ひ
心の内側は、常に同じ才能と知恵を持っているけれども、外見上のふるまいは、
数多く(常識とは)変わっていたのは、「取るに足らない(平凡な)人々から(尊敬の)念を、自分一人

一方にはとどめじと思しけるにや。
にだけは受けないようにしよう
とお思いになつたのだろうか。

この上人こそが、藤原道隆の追善供養の日に、法興院に籠り

て、曉方に千鳥の鳴くを聞き給ひて、
この上人こそが、藤原道隆の追善供養の日に、法興院に籠つて、

キ明けぬなり賀茂の河原に千鳥鳴く
夜が明けたようだ。
賀茂の河原で
千鳥が鳴いている。

今日もはかなく暮れんとぞする
今日も(また)あっけなく
日が暮れようとしている

と詠みて、『拾遺集』に入り給へり。
と詠んで、『拾遺和歌集』に
『拾遺和歌集』に
(その歌が)収録されなさつた。

明けぬるよりはかなく暮れぬべき事の、かねて思は
夜が明けたらすぐに、あっけなく
日が暮れてしまふにちがいないことが、以前から自然と悟つて

れ給へりけるにこそ。かの『拾遺集』には円松法印
いらつしゃただる。

あの『拾遺集』には円松法印

と載りて侍るは、上人の事にこそ。
として載つておりますのは、この上人のことである。